

昆虫⑩

春を待つ キリシマミドリシジミ卵

昆虫担当 中峯浩司

昆虫の冬越しのしかたは様々（卵、幼虫、蛹、成虫）ですが、今回紹介するキリシマミドリシジミは卵で越冬する蝶の1つです。

この蝶は県内では霧島や紫尾山、高隈山などの山地部に分布する他、屋久島には亜種ヤクシマミドリシジミが生息します。卵は夏季にアカガシの冬芽のつけ根に1個ずつ産み付けられ、大木の幹から伸びた小枝や林床の幼木についた冬芽からよく見つかります。

卵は7～8か月の眠りから覚めた4月頃、冬芽の芽吹きと同時にふ化し、幼虫は若葉を食べて育ちます。やがてさなぎの時期を経た後、1年に1回だけ6月下旬から羽化します。成虫の大きさはモンシロチョウを一回り小さくしたくらい。オスは緑色に輝く美しい羽をもっていて「森の宝石」とも呼ばれます。

1月26日、博物館フィールドワーカー養成講座のメンバー3人で、霧島に本種の越冬卵を探しに行きました。新芽のない秋にふ化

してしまうという、本種としてはマイナスにしかない観察例が本当かどうかを調べるためです。結果は次のとおり。

表 キリシマミドリシジミ卵の状態 (1/26, 霧島)

	正常	寄生	被食	ふ化済
卵の数	34	0	11	0



顕微鏡で詳しく調べたところ、秋にふ化したと思われる卵は見つかりませんでした。代わりに約3分の1の卵に、何者かに食べられたような、いろんな形の穴が開いていました。

温暖化の影響で秋にふ化するようになったら、本種にとっては絶滅への序章とも考えられるため大問題ですが、さて本当のところはどうなのでしょう。

鹿児島の植物⑩ 奄美群島固有のテンナンショウ

植物担当 大屋 哲

今年の1月下旬に、徳之島の植物調査を行いました。今回の調査では、奄美群島にのみ分布し、絶滅危惧種に指定されているテンナンショウの仲間を確認することを目的の一つとしていました。

テンナンショウの仲間は、サトイモ科で、ぶつえんぼう 仏炎苞と呼ばれる花をもつことや一つの葉が複数の小さな葉（小葉）にわかれ、鳥足状につくことなどが特徴です。

徳之島で、確認できたテンナンショウは次の3種でした。

① アマミテンナンショウ

山地部の林内や林の縁に生え、仏炎苞は外側が緑色で内側が緑白色をしており、小葉は15～19枚ほどつきます。



② オオアマミテンナンショウ

低地部の林内に生え、アマミテンナンショウよりやや大型で、小葉の数は少なく、仏炎苞や茎などは緑色をしています。



③ トクノシマテンナンショウ

山地部の林内に生え、仏炎苞が濃い茶色をしており、開花と同時に葉も開いていきます。小葉は7～13枚ほどつきます。

調査した範囲内では、いずれも十数株だけでした。山中を長時間歩き、ようやく見つけたときは感動しましたが、森林開発など、人の活動による環境の変化で、個体数が減少していることを目の当たりにしてさびしい気持ちになりました。

